

大学生の力を活用した集落活性化調査事業

研究組織：地域連携事業代表者及び事業推進協力者

所属・職・氏名：農学部 教授 守友 裕一

及び福島県企画調整部地域振興課 課長 西山茂樹

[事業の目的・意義について]

I はじめに

本調査事業は福島県企画調整部地域振興課が主催する「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」と連動させて行ったものである。これは平成22年度（2010年度）からスタートさせた「福島県過疎・中山間地域振興戦略 里・山いきいき戦略」の一環として計画し具体化したものである。22年度に引き続き23年度も計画していたが、23年（2011年）3月11日の東日本大震災、引き続き原発災害の中、福島県は大変困難な状況におちいった。しかし福島県企画調整部は本事業の重要性、過疎地域活性化への貢献を重視して、困難な中本事業を継続させる決断をし、今年度も実施することとなった。

参加大学は宇都宮大学、福島大学（2ゼミ）、日本大学、法政大学、立正大学、宮城教育大学、東京聖栄大学、仙台高専の8大学（9ゼミ）であった。

[研究方法について]

II 『笑顔をつなげよう

～現在から未来へ、布沢から福島へ～

宇都宮大学農学部農業経済学科守友ゼミナールは、前年度に引き続き、福島県南会津郡只見町布沢区を担当した。地域住民と一緒に住民に対する個別アンケート調査、各戸を訪問しての聞き取りによる戸別調査、地域の方々と一緒に道普請も行い、更に現地報告会とKJ法を活用した意見交換など、具体的なフィールドワークという調査・研究方法をとった。さらには福島県知事への報告と集落活性化県民討論会への参加・発表を行ってきた。調査結果は報告書『笑顔をつなげよう～現在から未来へ、布沢から福島へ～』として取りまとめた。以下学生達とともにまとめた報告書の

内容に沿って要点を紹介していく。

[事業の進捗状況ならびに事業成果について]

III 報告書の目次

- 1 はじめに
- 2 布沢区の概要
- 3 昨年までの活動
- 4 調査日程
- 5 アンケート
 - 5-1 アンケート調査の目的
 - 5-2 アンケート概要
 - 5-3 アンケート結果
 - 5-4 アンケート考察
- 6 戸別調査
 - 6-1 戸別調査の目的
 - 6-2 戸別調査の概要
 - 6-3 戸別調査の様子
 - 6-4 戸別調査結果
 - 6-5 戸別調査考察
- 7 布沢での中間発表会
 - 7-1 中間発表会の様子
 - 7-2 KJ法による意見交換
 - 7-3 中間報告会の考察
- 8 震災による影響
 - 8-1 森林の分校の利用客数
 - 8-2 震災についての考察
- 9 その他の活動
 - 9-1 道普請
 - 9-2 恵みの森
 - 9-3 森のふれあいコンサート
 - 9-4 - (1) 福島県知事表敬訪問
4 - (2) 集落活性化県民討論会
 - 9-5 - (1) 只見の雪まつり
5 - (2) 只見町町長との会談
5 - (3) 冬の布沢について

10 提案

11 今後の取り組み

補論 ゆっこぎについて

後記

参考資料

の活発化)

③今あるものの維持 (普請や祭りなど地域行事)

④外部の人の受入れの検討 (どのような外部との

交流があるか、出来そうかといった検討)

上記の①～④を土台の基本として考えた。

IV 昨年度事業とのつながり

昨年度は布沢での活動を9月(集落点検ワークショップ)と10月(集落内団体の聞き取り調査とKJ法)の2回行った。昨年度の活動目的は、先ず布沢での活動を通じ現在の中山間地域が抱える問題点、地域に残る資源、地域の人考える理想と可能性、そしてこれからどのようにして布沢を活性化してゆくかの提案をすることを中心に活動を行った。現状の把握を通じて今後どのような活動をしてゆくべきかの方針を考え今後の地域活性化のための土台作りを最終的な目的とし次の三角形のピラミッド型の構想を提案した。

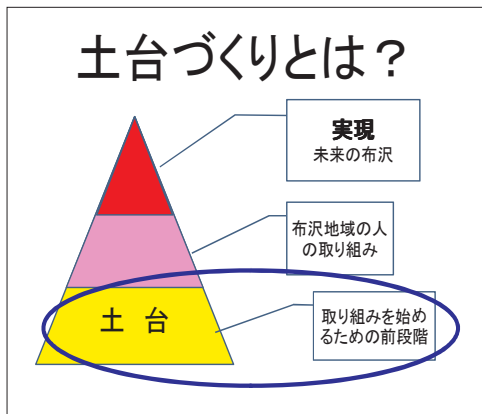
昨年度のこの土台に対する考えは、地域を私たちが直接見て聞いたり感じたりしたものが中心であった。今年度は実際に地元行事に参加させていただいたり、現地での詳細なアンケート調査や戸別聞き取り調査を行ったりすることで、昨年度に比べより具体的な部分にまで関わっていくことにした。

V アンケート調査

アンケート調査の中から一部をしてみる。

あなたが考える布沢の活性化とは何ですか？

(複数回答)



住民の希望 → 実現(未来の布沢)へ

つまり、ピラミッドの図でいう頂点の赤色の三角形の部分に布沢地区を到達させることが重要である。そのためには次の式が成り立つ。

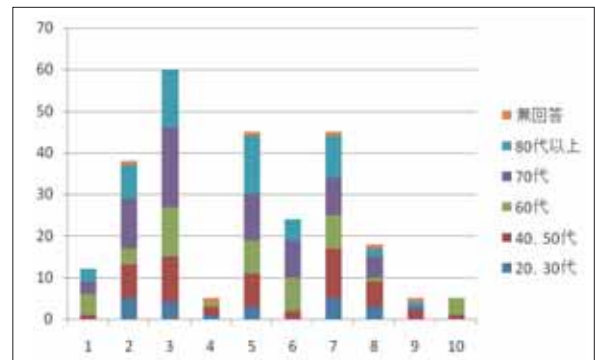
実現=土台+布沢地域の人々の取組

つまり実現には、前段階である黄色の台形の土台や実現に不可欠なピンク色の取り組みが前提にしなければならない。ここで重要なのは基礎となる土台作りであると考えた。

布沢地区での土台作りとは？

①道路開通:(松坂峠の通年通行)

②情報の共有化(集落内・外との情報発信&交流



- | | |
|------------------|-----|
| 1. 観光客が増加する | 12人 |
| 2. 移住促進 | 13人 |
| 3. 地域内のイベントの充実 | 14人 |
| 4. 外部との交流イベントの充実 | 7人 |
| 5. 特産品を作る | 21人 |
| 6. 道路の不便さを解消する | 38人 |
| 7. 活性化の必要はない | 10人 |
| 8. 分からない | 14人 |
| 9. その他 | 2人 |

ここに見るように道路問題が鍵となっている。

VI 戸別調査(地域内での戸別訪問調査)

戸別訪問調査では地域によって特徴に差が出た。地域に即した対応の必要性があることがわかった。

	森林の分校周辺 (区の入口)	公民館周辺～猫淵清 水周辺 (区の奥)
家族形態	夫婦二人暮らし	高齢単身世帯、3世 代の世帯
農業形態	少量多品種 バラエティーに富む	小規模自給的田畑農家
買 物	車持ちが多い (小林や只見に出る)	車持ちが少ない (雪んこタクシーを 利用)
震災の被害	森林の分校の利用者 数減	あまり見受けられず 水害の被害あり

VII 布沢での発表会



参加者で記念撮影、
時間の都合でやむなく先に帰った小中学生もいた

現地で行った発表会では、アンケート調査、戸別調査の結果とそこから読み取れることについて、住民の前で報告した。

アンケート調査での質問項目の中から上位のものを三つ選び、さらに笑いを誘うための「にせの答え」も混ぜて回答してもらった。

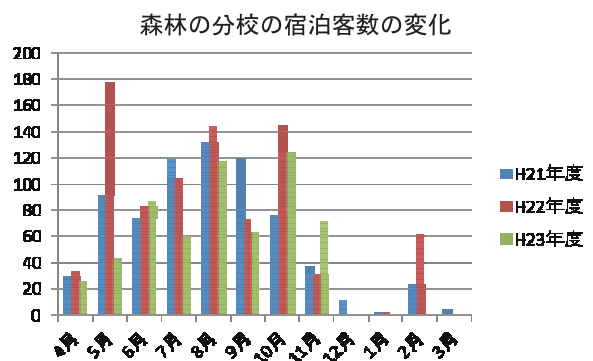
例えば上記のアンケートで「あなたが考える布沢の活性化とは何ですか」という項目については、「質問：布沢の活性化とはなんだべ??」と聞いて、「1 特産品を作る、2 道路の不便さを解消する、3 地域内のイベントの充実、4 守友先生が移住する」との質問をする。4は「にせの答え」である。

皆に自分が正解と思う答に手を挙げてもらったあと、「答：道路の不便さを解消する」と正解を知らせる形をとった。4の答に笑いが起こるとともに、自分の答が正解であったときには安堵感のような雰囲気があふれた。なおクイズの景品には「宇大グッズ」である湯飲み茶碗やタオルを出した。宇都宮大をいつまでも覚えておいてもらおう

という狙いも込められていた。

休憩時間にはトランプマジックの出し物や、参加者には高齢者が多いことから体をほぐす体操も行って和やかな雰囲気で行った。昼休みには地域のお母さん、おばあさんが持ち寄ったご飯やおかずで、学生達は大満足であった。なお仕事の都合で、50～60歳代の男性の参加が少なかったため、その夜その層も含めて、懇親会も兼ねて2回目の発表会も行った。

VIII 震災による影響



布沢では、東日本大震災と原発事故による物理的な直接の被害は特になかった。しかし、森林の分校の利用者数を過去2年間と比較してみるとH21年度からH22年度にかけて増加傾向であったが、H23年度は大きく落ち込んでいる。特にGW(5月のゴールデンウィーク)の落ち込みがひどく、7～10月も前年度と比べて大きく落ち込んでいる。原発事故による風評被害の影響と推測できる。早急な対策が必要である。

IX 集落活性化県民討論会

福島市で開催された集落活性化県民討論会に参加して報告を行ってきた。



佐藤雄平知事を囲んでの説明会も行った
(上は知事を囲んでの記念写真)



福島県民の前で発表をする学生達

X 提案

今回の調査を通して、これからの布沢区の活性化のために重要な点が明確となった。

それらを今後も続けるべき良い点 (Keep)、改善していく必要がある点 (Problem)、地域活性化に向け、これから取り組んでいく提案 (Try) の3つの観点から以下のようにまとめた。

○ Keep (今後も続けるべき良い点)

- 分校に外部の人を入れる取り組み
→コンサート (イベントの開催)、雪まつりからの観光客 (宿泊)、恵みの森の利用等
- 資源 (自然、人、食、伝統) の保全
→道普請、老人会や婦人会などの集まり、ゆっこぎ (伝統的な作業着) やマリなどの伝統的なものの継承
- 今回の事業を継続し、学生を地域に入れること

アンケート結果から区民は区の自然の豊かさと人間関係の良さを誇りに思っていた。これは私たち学生が感じた区の良さとも合致している。これは普段の区民の生活に加え、集落全体の活動である道普請や老人会の集まりも大きいと考えられる。また、既に始まっている地域活性化の事例、そしてさらに新しい活性化の可能性や今まであった資源を包括する上でも、学生の継続的な関わりは必要である。

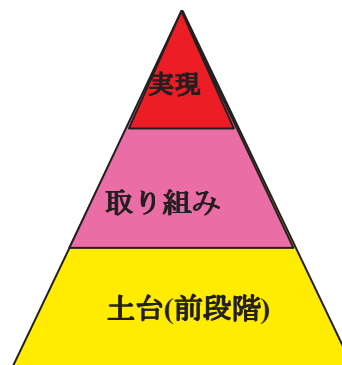
○ Problem (改善が必要な点)

- 交通の便 (松坂峠、雪んこタクシー、バス)
 - 分校の利用客数減少 (風評被害をくいとめること)
- 分校の効率的利用 (森の居酒屋、都市農村交流)(分校や恵みの森)

今回の調査では布沢の中での集落の位置で、異なった活性化が必要であることが分かった。区の奥では交通の便等の生活の質の改善、入り口では生活の質の向上が必要である。そのために、まず区の奥では交通網を、区の入口では分校の効率的に利用し、外部との交流を深めることが挙げられる。

○ Try (地域活性に向けて、これからやってみたいこと)

- 具体的に出た案をひとつひとつやっていくことで、地域が元気になる。
- この地区で出た活性案の実行
- 学生のサークル化 (むらづくりサークル) による布沢区への関わり



具体的な案を一つ一つ実行し、地域を元気にして行く。元気になった地域が集まり県全体は元気になる。元気な県が増え日本全体が元気になる。そうしていくためにも活性化案を実行に移したい。また、学生側も関わりやすくするためにサークル化を検討したい。

○提案

以上3つの観点から見えた具体的な提案を以下に示す。

- ①交通の便の改善について区民・行政・法人での話し合い

②分校を拠点に（分校の効率的利用）し、外部との交流を促進

資源（自然・人・食・伝統・場所）を利用
…森の居酒屋、都市農村交流、空き家の利用

③情報の共有化（分校の通信）

アンケート結果の効率的利用

④拠点作りとして分校と公民館の利用

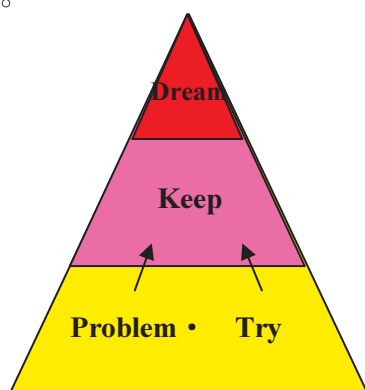
区の入口だけでなく、区の奥にも拠点を生み出す。

⑤次世代教育として地元の子供たちによる地域資源調査・ワークショップ

大学生の取り組みを地区の子どもたちが担い、地区の子どもたちが地域を活性化させる。

前年度（2010年度）までの活動に加え、今年度（2011年度）の活動では地域活性化の土台作りをしてきた。

その土台作りの一段階目として、前年度は地域の資源を再発見した。今年度では土台作りの二段目としてその資源が実際に有効活用できるのかどうかを主に調べてきた。その結果、地域活性化に向け、基本的に必要な事や取り組めることとして Problem や Try といった観点からまとめる事ができた。更には、調査をする段階で、既に実際に活性化に取り組んでいる事例もあった。それが、Keep としてある。今後は Problem や Try を実際の取り組みとしてはじめ、それを Keep していくことが地域活性化になる。しかしながら、それにはもう一つの大前提＝「実現」のビジョンが必要である。



上の三角形の部はそれを図として示したものである。Problem（問題、課題）を乗り越え、Try

（挑戦）して、大切なものを Keep（維持、守り育て）しながら、Dream（夢）を実現していこうという構想である。

XI おわりに

地域と大学から事業ならびに経費を受けて、この調査研究と教育活動に取り組んでみようと考えたのは次の理由であった。

過疎・高齢化が進む地域、集落を若者・大学生が支援しようという動きは、今各地で起こりつつある。NPO法人地球緑化センターが長きにわたって取り組んできた「緑のふるさと協力隊」をはじめとして、全国の学生有志による「地域づくりインターン」、農水省の「田舎で働き隊」、総務省の「集落支援員」、「地域おこし協力隊」など多岐にわたる。

こうした実践の中で共通項として明らかになってきたのが、地域の方々と学生達の二重のスパイラル的成長が見られるという点である。何も知らない学生達が地域の方々から長年培った経験や技術、生きてきた教訓などをお聞きする中で成長し、また話を聞き取ってもらうことで地域の方々が自分自身の生き方に自信と誇りを取り戻し、そうして地域の方々が前を向いて進んで行こうという気持ちになり、その一歩高まったレベルの地域の方々の姿勢から、学生達が更に学び成長していくという二重の相互成長の関係である。

こうした地域調査研究と、地域の方々の自信・成長、学生達の成長とを一体的に構築していこうということが、本調査研究に取り組んだ理由であった。福島県出身以外の学生達も含めて全力で、只見町布沢区という地域を通して福島の復興、日本の復興を真剣に考えた。困難な中成長した学生達の姿にエールを送って頂ければ幸いである。

この調査にあたっては湯田次雄布沢区長様をはじめとする布沢区の皆様、只見町役場、福島県企画調整部地域振興課、福島県南会津地方振興局の皆様方に大変お世話になった。篤くお礼申し上げます。